

「赤木と大谷翔平と西郷どん」および「コナンとヒラテとフカセ」の関係



ついに平成30年2月で「アカギ」が終わるそうです。昭和40年、戦後の闇に乗じて、生きるためにありとあらゆる手を尽くして財を成していった鷺巣と、戦後の闇の中で、どんな修羅場を生きてきたのか？少年でありながら「死の中に生の輝きを見出してしまった」アカギとの死を賭けた麻雀対決の物語。20年間費やして半荘6回(笑)。読者全員20年間ずーと惹き込まれたまま状態。時間は相対的に流れていると確信状態。人間の本质の中に埋め込まれた永久に終わらない、何度でも始まる究極の陰陽対決の物語。セブンイレブンに毎日、意味もなく、何も欲しいものがないのに寄ってしまう自分が、唯一、入り口の単行本コーナーに目をやってアカギの新刊が出ているかどうか確認してしまう状態。低欲望社会といわれていますが、決して日本人の欲望自体が低下しているのではなく、空腹を満たす商品は溢れかえっていても、空白を満たす商品がほとんど商品棚に見当たらないのだと思います。では、アカギはなぜ我々の空白を満たすのか？その答えのようなものが書かれた太平洋戦争時の文章があります。『青年の思索のために』 下村湖人著 PHP研究所より引用(夜襲の直前)

『一夜襲の準備がすっかり整ってから、いよいよ出発するまでの時間ほど、みんながしいんとした気持ちになる時はありません。むろん、しいんとした気持ちといっても、それは人々によっていろいろにちがいます。しかし、ともかくも、みんなの心から、利害の打算とか、見栄とか、そういった邪念がなくなっていることは間違いないことのようにです。その証拠には、ふだんはあまり仲のよくなかったもの同士が、そんな時には、そっと手を握りあったりするのです。つまり、死を前にして、いやが応でも真面目になり、いつもの表面的なものをかなぐり捨てないではいられなくなるのでしょう。私自身、その時の気持ちをあとから反省してみしても、たしかにそうだったのです。私は、その時はじめて、人間としてのほんとうの自分というものを知ることができたように思いました。私をそれまで動かしていた自分は、実はどうでもいい自分で、私の中には、私がそれまでまるで知らないでいた尊い自分、しかも永久に死なない自分というものがあるということに気がついたのです。そのときの気持ちは、ちょっとどういったらいいでしょうか、何だか自分で自分を拝みたくするような気持ちとでもいったらいいかと思いますー』 K君はそういつて、じっと眼をとじました。。

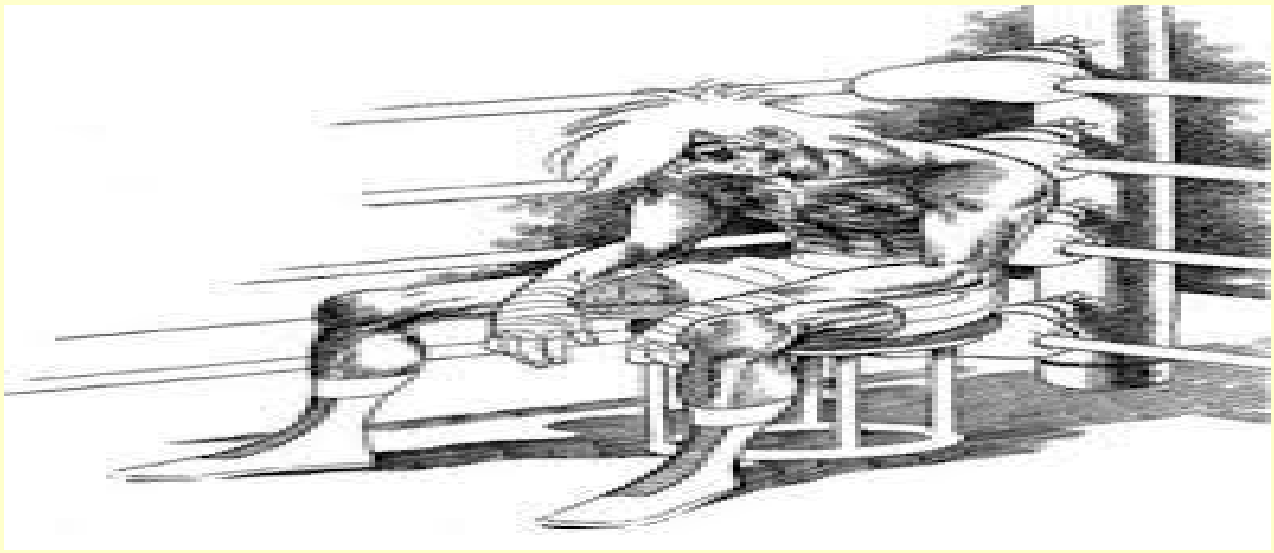
以下省略(終戦2年半後)

『私は、いつか、夜襲の直前に、永久に死なないほんとうの自分というものをつかむことができた、というなお話をしましたが、このごろ、それがはずかしくてなくなりました。復員後、もうそろそろ二年半になりますが、この二年半をかえりみてみますと、夜襲のまえにつかんだと思ったほんとうの自分は、いつの間にか消え去って、その代わりに、またもつような浮薄なものが私の心の中にのさばり出し、最近では、やはりその浮薄なものがほんとうの自分でないか、という気になってきたのです。』

↑↑↑

このような掴みどころのないピュアな感覚を、現代の平和な日本人もどこか内心求めている、ことごとく鷺巢のセオリー、自分軸、存在理由を裏切り、激怒させ、自分で自分を窮地に追い込みながらも局面打開していくアカギによって呼び覚まされているのかも知れません。

アカギの理想像は多分、自分軸を貫き通した生命の完全燃焼状態だと思います。↓↓↓



著述家 執行草舟氏は自著『「憧れ」の思想』の中でこう看破されていらっしゃいます。

『肉体的に生きるという利口な生き方へと埋没していく人間の悲劇』

『生命が抱える愚かさと利口さの二項対立は、「憧れ」が薄れる限り必ず「利口」の方に決着するのだ。』

↓↓↓↓まさに驚巢とアカギのことを評しているような箇所もあります。↓↓↓↓

『利口とは、損得に長けて、現世を賢く生き、現実の流れに身を委ねて楽に生きる生き方のことを言う。私の考えで言えば、水平的な生き方であり、物質的な生き方であり、肉体的な生き方ということだ。一方で、愚かとは、人間の憧れだけのために生き、人間精神の理想のために命を捨てる覚悟を持つ生き方のことを言う。それは垂直の生き方であり、生命的な生き方であり、精神的な生き方である。』

『愚かとは、すべてを捨てることによって、すべてを得る人間精神の根源なのだ。』



そういう観点からみると、エンジェルスの大谷選手は完全に垂直の憧れに生きているといえます。

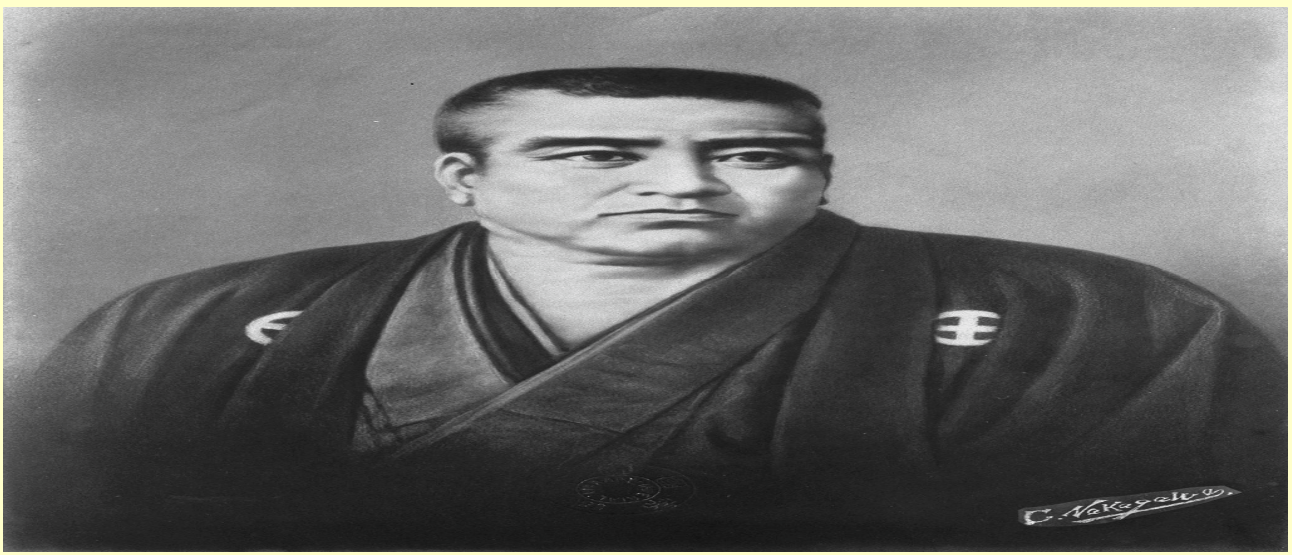
「お金がすべてではない。アスリートは反射的にこう言うが、ファンは軽蔑の眼差しを向けている。なぜなら、もちろん、お金がすべてだからだ」「しかし、彼にとって本当に重要でないことは、少なくとも私たちが知る限りでは、契約の際のお金の大きさだ。珍しいことだが恐らく、ときには本当にお金がかすべてではないのだ」

全米巨大メディアの目を点にさせてしまった大谷選手の凄さですね。自分の理想を追い求めることがすべての価値に優先される、まさに『道』を極める世界。

本来の面目坊が立ち姿一目見しより恋とこそなれ

一休禅師の句ですが、理想の自分を一瞬垣間見た瞬間、虜になり、寝食を忘れてそこに至ろうとするという意味の句です。自分の理想の姿をなんとなく掴みかけているがゆえに大きな谷（地方弱小球団）を選択し、そこからカリフォルニアの太陽に向かって垂直に飛翔しようとしている大谷翔平選手のピュアな世界観と同じです。

天使のご加護のありますように！



そしてなんといっても日本人で最も自分軸を大きく貫き通したのは西郷さんだと思います。もう頭と天が垂直につながっているとしか思えません。命を天に預けたような生き方。自分の中にある利口さを徹底的に排除して愚かであろうとする姿。日本人が昔から持っていた純粋な精神的感覚。これ以外は自分ではないという感覚。開国し、西洋文化の流入で失われていってしまうことのない様に、命がけの戦（西南戦争）で日本人の心に楔を打ってくださったのだと思っています。



しかしながら、自分という軸が強固であればあるほど、絶対に譲れない状況、全面激突の状況ができあがってしまう。西郷さんの想いとは裏腹に、それを避けようとする知恵として戦略的道化という第3の道を戦後の日本は選択してきたのではないかと感じています。プライドと引き換えの平和となりますが、実際、とてもかけがえのない平和が享受できたと思います。が、副作用もあります。国家の在り方と子供の無気力、いじめなどの問題はどこかで通底していると思います。解決法は日本人全体の生き方の問題にかかっているのではないのでしょうか？



<https://www.youtube.com/watch?v=aOXgk-i7zlg>

<https://www.youtube.com/watch?v=gfzuzDrVRVM>

<https://www.youtube.com/watch?v=gsVGf1T2Hfs>

ピュアに生きるのか？激突するのか？戦略的道化か？単なる道化か？利口か？はたまたアウフヘーベンか？まさにどう生きるかを一人ひとりが問われている時代だと思います。



テクア技研の社訓「厭離穢土 欣求浄土」は「この荒んだ世を浄土に」という意味合いで徳川家康公が戦の時に好んで使っていた言葉ですが、我々は「現場を、来たときよりも美しくして帰ろう(その気持ちで安全な作業現場をつくる)」という意味合いで使っています。でもじつはもう少し前前前世的に空間軸と時間軸を延長して「この世に 来たときよりも美しく自己成長(進化)していく!」というイメージも持っています。

自分を自分で成長させているという感覚、本来の自分で在るという感覚、一歩踏み出す勇気の感覚、急がば回れで一歩引く勇気の感覚、無言で愚直にコツコツ積み上げる感覚、矛盾を超えて生きる感覚、自分の道を完全燃焼している感覚、手ぶらで自在に対処できる職人的感覚、エゴ全開で楽しんでいるにもかかわらずそれが地球の裏側の誰かの為になっているアイデアが湧いてくる感覚、超多忙の中ジョジョのように止まった時の中で動ける感覚、カオナシを「え?」って言わせる感覚、佐野元春のBGMでSPECの最期の感覚、あまりセブンイレブンには売っていないかもしれませんが、平成30年元旦、欲しいものは山ほどあります。

感謝! 羽原篤史



<https://www.youtube.com/watch?v=d4Kijkkz4f0>

https://www.youtube.com/watch?v=3or_szPAbzc